

# 日米安保条約と駐留米軍 (1)

練馬区 板橋光紀

太平洋戦争で日本が負けたのは「日米の物量の差」であったと云う人が多い。いくつかの重要な海戦で敗れ、制海権を失ってからの日本軍が衰弱してゆく速度は速かった。南方の島々で戦っていた将兵の死傷者には、敵の銃弾に当たって戦死した者よりも、食糧が尽きて餓死するとか、医薬品の不足や医療態勢の不備から命を落としていった人々の方が多いとさえ云われている。制海権を失ってからは日本の輸送船が次々と撃沈されて、物資の補給が満足になされなかったせいであることは云うまでもない。

武器の優劣や将兵の志気、作戦の巧拙もさることながら、現代の戦争では「後方支援態勢」が勝敗のカギとなる場面が多い。

ベトナム戦争では、ベトナムと云う南北にミミズのように細長くのびた、ほとんどジャングルばかりのような地形で、守る方も攻める方も共に前線への物資の補給が極めてしづらい環境での戦いとなり、お互いに相手方の補給を断つことと、それを確保することに作戦の重要な部分が占められていたと云ってもよい。

ちっぽけな北ベトナムが超大国アメリカを相手に10年を越える長い期間ほぼ互角に戦い抜いて、しかも結果的にアメリカをベトナムから追い払う成果をあげることが出来たのは、ソ連や中国からの絶え間ない物資の供給に負うところが多い。

この戦争には、アメリカ側に味方して参戦した国がいくつかあるが、中でもタイは近隣に位置している事もあり、出撃基地として、物資補給の基地として、アメリカ軍の傷病兵の医療及び休養地を提供する等、重要な役割をはたしている。

韓国軍は、最初「後方支援で」との約束で参加した。常時5万人を派兵して1年で将兵を交替させることになっていたが、7年間もつきあう結果となってしまった為、延べ35万人の将兵がベトナムへ派遣された。もっぱら前線への物資を輸送したり、傷病兵の医療を担当することになっていた為、韓国軍の主力は輸送隊と医療班、それにそれらを護衛する警備隊とから成っていた。しかし後方支援と云えども戦線が広がるにつれて損害も増えて参り、5万人の中身は次第に戦闘部隊の比率が高くなってしまい、行きがかり上、韓国軍の中でも最新鋭と云われる虎の子の海兵隊まで投入する程のめり込んでしまう。

7年間の損害は、戦死者が7,000人で、負傷者が35,000人。アメリカ軍の派兵はピークで54万人、10年間で延べ350万人。死者と行方不明は6万人で負傷者が30万人と云われるから派兵将兵数からすると後方支援が目的である筈の韓国軍の損害比率は戦闘部隊中心のアメリカ軍のそれにヒケを取らない。

湾岸戦争ではイラク軍と多国籍軍との戦力の差は

歴然としていた。空軍と海軍ではその差は益々開いて来るが、地上戦ではイラクが勝つチャンスが僅かでは有るが残されていたと云われる。それは他国籍軍の後方支援隊が輸送している諸々の物資の内、水を運んだタンクローリーを破壊するだけで事足りる。乾燥した砂漠地帯で水を絶たれると、前を行軍する戦闘部隊は如何に最新の装備を携行しようとも、旺盛な志気を鼓舞しようとも、半日も経たない内に脱水症状を呈し、数日間で全滅する。土地に慣れない外国人程早く衰弱し、将兵の人数が多ければ多い程、戦わずして早く全滅する。武力では勝てないイラク軍が必死にこれを試みようとしたのもうなずける。

さて日本政府は安保条約を根拠に、有事の際、後方支援を行うことを約束し、その支援範囲を話しあっている。後方支援には大きく分けて二通りあり、日本側の人命上のリスクと金銭的な負担に基づいた、参戦と同義語になるものと、アメリカ側の必要とする物資の供給や、建築、輸送などの役務の遂行を対価の支払いを前提にして、主に民間の業者とアメリカ軍との間で契約をもって取引される商行為を推進するか、又はそれらの行為を妨げない姿勢を示すことであろう。

後者の方は、民間によるコマーシャルベースの純粋な商行為であり、取引当事者が取引相手のアメリカ人から頼りになるビジネスフレンドと遇されようと、内外から「死の商人」呼ばわりされようと、有事、無事に関係なく今までも行われて来た。私自身もベトナム戦争中それら当事者の一人であったことを白状しよう。

我々戦前に生まれた人間は、幼いながらも戦争の恐ろしさを多少経験しており、両親の苦勞している姿も見ているから、米軍へ売り渡す物資が戦地で使用され、たとえそれらが人命を救う為の包帯であらうと、ペニシリンやモルヒネであっても、戦火がエスカレートするにつれて売上高と利益金額が急上昇して来ると多少罪悪感を感じて来るものだ。

しかし戦地に居て戦局の推移を観察したり、損害のサイズや次の入札品目に関する情報収集に駆けずり廻ったり、米軍や韓国軍の物資調達担当将校達と毎晩酒を飲んで騒いでいるうちに、段々マヒして来てしまう。調達品も多岐に渡り、ジャングルシュウズから双眼鏡、懐中電灯や野営テント等々、人命救助用品なのか攻撃用装備なのか仕分け出来ない品目も要求される。

ある日サイゴン郊外にある米軍基地内の将校クラブで顔見知りの将校達に混じって雑談していると、酒に酔った若いアメリカ軍将校が近づいて来て「俺たちが血を流して戦っているのに、お前たち日本人